むすめが草原を歩いていくと、パン焼き窯がありました。窯にはパンがいっぱいつまっていて、そのパンがむすめにむかって、
「ああ、わたしをだしておくれ、だしておくれ、こげてしまう。わたしはもうとっくに焼きあがってるんだ」とさけびました。
むすめは近よっていって、パンをぜんぶ取り出してやりました。

↔

むすめは草原を歩いていきました。パン焼き窯のところまでくると、パンがむすめにむかって、
「ああ、わたしをだしておくれ、だしておくれ、こげてしまう。わたしはもうとっくに焼きあがってるんだ」とさけびました。
けれども、なまけもののむすめは、
「わたしがよろこんで手をよごすとでも思っているの」といって、どんどん行ってしまいました。

「ホレばあさん」『語るためのグリム童話1』小澤俊夫監修／小峰書店

先にでかけた娘の行動と、ふたりめの娘の行動を比較してください。行動だけで、ふたりの性格がすぐにわかりますね。ふたりめの娘については、「なまけもののむすめは」と形容されていますが、ほんの一語です。主に行動で示されるので、イメージがクリアです。

ある日、おじいさんがごはんを食べたあと、縁側にすわって、きせるで一服やっていると、庭につばめが一羽落ちてきました。つばめは、ばたばた、ばたばた、もがいています。
おじいさんが、
「おや、どうして立てないのだろう」と思って、庭におりてよくみると、つばめの足が折れていました。
「おお、おお、おまえは足が折れたのか。かわいそうに。どれ、わしがなおしてやろう」
おじいさんは、つばめの足に薬をぬり、細い木の枝をそえ木にあて、布のきれっぱしでまいてやりました。それから毎日、つばめの介抱をしてやると、七日ほどでつばめの足はなおりました。
「さあ、なおったぞ。これからはだいじにして、たっしゃで暮らせ。来年もまたおいで」
おじいさんは、つばめにそういうと、空にはなしてやりました。

「足おれつばめ」『日本の昔話2』小澤俊夫再話／福音館書店

おじいさんの会話文と、薬をぬったり添え木をあてたりという具体的な行為から、おじいさんが、思いやり深い心の優しい人であることが直接的に感覚的に分かります。おじい

さんの性格を言葉でくどくどと説明していません。

ある日、じいは、いつものように山へはいっていきました。すると子どもたちが、なにかを縄でしばりあげて、たたいたり、つついたりしていました。近よってみると、しばられているのは、やせたきつねでした。じいは、

「これこれ、そのきつね、わしにゆずってくれ」といい、いくらかもっていた銭を、ぜんぶ子どもたちにわたしてやりました。そして、きつねの縄をといて、

「おまえ、もう、こんなところにでてくるなよ」といって、茂みの中にはなしてやりました。

「きつねの恩返し」『日本の昔話3』小澤俊夫再話／福音館書店

おじいさんの優しさが、いじめられているきつねを助けるという行動であらわされています。ここでも性格を説明していません。

桃太郎は、ごはんを一杯食べれば一杯ぶん、二杯食べれば二杯ぶん、三杯食べれば三杯ぶん、大きくなりました。けれども、いっこうに働かないで、昼寝ばかりしていました。

ある日のこと、村の子どもたちが、

「桃太郎、山へ柴刈りにいかないあｋ」と、さそいにきました。桃太郎は、

「きょうは、柴を刈る鎌がないから、いかない」といって、昼寝をしていました。

つぎの日、また村の子どもたちがさそいにきても、桃太郎は、

「きょうは、柴をたばねる縄がないから、行かない」といって、昼寝をしていました。

その次の日、また村の子どもたちがさそいにきても、桃太郎は、

「きょうは、柴をかつぐ棒がないから行かない」といって、昼寝をしていました。

そのまた次の日、村の子どもたちが、

「桃太郎、山へ柴刈りにいかないか」と、さそいにくると、桃太郎は、

「それじゃあ、行こう」と、のっそりおきあがりました。

「桃太郎」『日本の昔話3』小澤俊夫再話／福音館書店

なんと怠け者の桃太郎でしょう。けれども、怠け者であることを言葉でくどくど説明しないで、言い訳をしながら昼寝ばかりしているという行動で、桃太郎の性格を表しています。